２級　【シーチング組み立て】傾向と対策

＜地直し・布目＞

・シーチングの地直しは、縦方向と横方向の 2 本の基準となる線がないと正確に行うことが難しいと思われる。地の目通りに線を入れ、縦横が直角になるようにアイロンをかける。シーチングの地直しが不完全なためにシルエットがうまく出ないこともあるので、試験以前の課題として適切なシーチングを正確に地直しし、しわの出ないように持参するよう心掛けていただきたい。

・試験前の準備がきちんとできていれば試験中の作業にも余裕が出来、より完成度の高い仕上がりが期待できるように思う。

＜身頃＞

・今回のデザインは、３面構成のパネルラインということで、バストダーツはウエストダーツを利用したマニピュレーション処理、後ろ肩ダーツはイセで処理することになる。原型操作の段階でダーツ量の分散が正しく行われていないと、きれいにシルエットが表せない。

・マニピュレーションの組み立て方はウエストダーツをピン打ちしポケット口が上下突合せになった状態で裏面から接着芯や接着テープで貼り合わせる。その後、前パネルラインを伏せ、ポケットを付ける。そのように処理をしないとポケット口が開いてしまいシルエットが崩れる原因になる。

・切替え線は、適切なラインが描けていないとピン打ちしても思い通りのシルエットにならない。切替えの位置やカーブをデザイン通りに描けるようしっかり練習して試験に臨んでいただきたい。

・シーチングの縫い代を片倒しの状態にピン打ちする場合、どちら側を上に乗せるかについても正解があるわけではなく、結果としてシーチングが美しく表現されていればよい。一般的には片返し処理をして縫製するときと同じ方向に倒すことが多い。

・ピンの間隔や打つ位置もシルエットに大きく影響する。どこにピンを打つべきか、どのくらいの間隔でピン打ちするかよく考えて組み立てる。

・ジャケットに限らず前端や裾、袖口は出来上がりに折り、縫い代が出てこないようにある程度ピンで止める。折られていなければ未完成として不合格になるので注意する。

・組み立てたジャケットをボディに着せ付けする場合、前中心・後ろ中心を合わせシーチングが着崩れないように、必要な箇所にピン打ちをする。ボディの肩にかけているだけのシーチングは完成していないと見なされるので注意する。

・後ろ中心の始末は模範解答のように左身頃の出来上がり線も写し伏せて縫い目として表現することが望ましい。縫い目として表現しない場合は、後ろ中心の出来上がり線とボディの中心線を正確に合わせ、ずれないようにピンで固定する。固定するピンもどこに打てばシルエットを安定させて着せられるかよく考えてピン打ちする。

＜ボタン（身頃）＞

・今回、ダブルブレストであったので、中心を挟んで同距離に左右ボタンがつく。左右・縦方向のバランスを見て、デザイン画通りになるよう付ける。

・配点の対象ではないが、ボタンホールも記入し実物縫製した時の雰囲気が表現できるようにしていただきたい。模範解答のようにボタンを上から付けると付け位置が隠れてしまうので、ボタンにも十字の印を入れるか、ボタンホールを身頃に記入し付け位置も明確に表現していただきたい。

＜ポケット＞

・今回は箱ポケットになる。箱布の上がりを写し、ポケット口側の縫い代を少し多めにカットして、周りをしっかりとアイロンで折る。身頃に止めないポケット口の部分は特にしっかり折られていないと箱布が崩れて仕上がりがきれいに見えない。

・組み立ての場合、両脇と下端の付け線をピンで止める。そうすることで、実際の箱ポケットのように上から手が入れられ、より仕上がりが想像できるようになる。

・マニピュレーション処理はポケット縫製時の切り込み位置にされるので、身頃にもポケットつけ位置を正確に写し、設定通りの位置にポケットが付くようにする。

＜衿・衿付け＞

・衿の地の目はたて地、バイアス地どちらでもよいとされているが、地直しをしっかりし、ゆがみがないよう組み立てていただきたい。

・今回の衿は衿付け止まりが判断しづらかったと思うが、パターン作成時に決め、設定どおり組み立てをして欲しい。そのためにはラペルにも、衿にも付け止まりの合い印を入れて正確に組み立てていただきたい。

・衿の外回りの縫い代は裁ち切りでもよいとされているが、特別な場合（微妙なカーブ線や形状の場合）以外は裁ち切りにしないで、縫い代が浮き上がらないようにアイロンでしっかり折り込んで、ピン打ちはしないほうが望ましい。衿付け線のピン打ちは、縫い代を折って縫い目線の際を衿付け線に沿って平行に止めるとよい。

・ゴージ線のおさまりが悪いと返り線にも影響が出てしまうため、ゴージ線の組み立てもラペルか衿のどちらか片方を折って縫い目線とし、きれいに組み立てをしていただきたい。

＜袖・袖付け＞

・袖を組み立てる段階で肘のくせを表現するためには、組み立て前に外袖のくせ取りが必要である。くせ取りがされておらず袖の形状が悪いものが多くあった。

・袖口の明きみせの始末も不備（明かないもの、エッジ始末の不良）のものがあった。事前に確認して試験に臨んでいただきたい。

・肩パッドが縫い代端まで届いていないものや前後片方に偏って付いているものは、安定した状態で袖付けがされず、見栄えが悪いものが見られた。肩パッドはアームホールの縫い代に端から端までがしっかりと掛かるように設定し、はみ出した余分な部分はカットする必要がある。

・袖付けのピン打ちは、縫い目線の際を袖付け線に沿って平行に止めるが、ピン打ちの不備のために袖のシルエットを崩してしまったものが多かった。ピン打ちでイセの表現ができない場合は、ぐし縫いをするなど袖山の形状をある程度整えてから付けるなど工夫が必要ではないかと思われる。

・袖を素早く安定して付けるには、パターン上でイセの配分をし、合い印を入れておく。それを身頃と袖のトワルに確実に写し、組立てる必要がある。

・袖は体型上振りが必要である。作図の段階で振りが表現されているのはもちろんだが、袖を付ける段階でも袖が振れているよう付けなければならない。事前に練習が必要である。

・最後に、シーチングの組み立ては、ただパーツが組み合わさっていればいいわけではない。業務として考えると、他の人が見て実物の商品が想像できるものでなくてはならない。デザイン画にあるパーツ全てそろえるとともに、実物の形状と同じ形に組むことが最も大切なことである。普段から手を抜くことなく、繰り返し練習を積んでいただきたい。